

うるくの歴史と文化を語る会
会報 ガジャンビラ
第20号

発行：うるくの歴史と文化を語る会
 発行人：赤嶺健治 編集人：赤嶺和雄
 〒901-0156
 那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内
 TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486



赤嶺 健治
 (うるくの歴史と文化を語る会 代表)

第11回うるくまーい（ていみぐしく 豊見城まーい）について

本会の主要年間行事である歴史と文化を訪ねる「うるくまーい」を、好天に恵まれた平成28年3月13日（日）に実施しました。第11回目の今回は、小禄のルーツともいえる豊見城廻りとし、午後2時に南部広域市町村圏事務組合運営の南斎場（旧豊見城火葬場）近くの石火矢橋のたもとからスタートしました。案内人を務めて下さったのは、豊見城龍船協会事務局長で具志出身の赤嶺秀義氏でした。（参加者は29名。）

● 今回のコースでは、石火矢橋から豊見城城址の豊見瀬嶽と周辺御願所や「ハーリー発祥の地」石碑を回り、漫湖や那覇市街を一望できる標高54mの高台から、とよみ大橋近くの機織関係施設跡を眺望しました。漫湖に注ぐ饒波川下流に架かる石火矢橋は、首里城を起点に真玉橋を経て那覇港南岸に軍勢を集結させるための「真珠道」の道筋にあったため、軍事的にも、交通の要衝としても重要な橋でした。美しい5連の石造アーチ橋であったが、沖縄戦で破壊されたとのことです。

豊見城城址では、首里城公園の1.3倍もあるとされる一帯の広大な面積に改めて感動しました。豊見城グスクは、琉球が三山時代の1400年頃、後に南山王となった汪応祖が築き、その後三山統一の戦いの際、1429年に中山王の尚巴志に攻め落とされています。1853年にはペリー艦隊一行も訪れていました。1960年代から豊見城城址公園として多くの来訪者で賑わったが、2003年に閉園し、今は園内遊覧車の細いレールだけが昔日の面影を残しています。現在、跡地利用計画の一環として沖縄空手会館の建設工事が進められていて、2017年年初に完成の予定です。

豊見瀬嶽は赤瓦屋根の立派な建物で、地元と周辺集落の守護神をはじめ、豊見城城主と関係者の靈を祭った場所です。雨乞いの神や農耕の神、各集落の按司神も祀った周辺御願所と併せて神聖な雰囲気の境内を構成しています。案内人が最も熱く力を込めて説明したのは、ハーリー発祥についてでした。境内入り口に、2005年5月に建立された「ハーリー発祥の地」の石碑が立っています。ハーリーは、約600年前、豊見城城主汪応祖が中国留学の際に見た伝統行事の龍舟競漕を参考に龍船を造らせて、漫湖に浮かべたのがはじまりとされています。豊見瀬嶽では、毎年、4月下旬か5月上旬に、豊見城龍船協会主催の「ハーリー由来まつり」が開催され、「豊見城上い」の伝統を継承し、那覇ハーリーと豊見城ハーリーの成功と五穀豊穣を祈願する行事が行われています。

城址から漫湖の方角を望み、王国時代に那覇、久米、泊の代表がハーリー舟を漕ぎ着け、豊見瀬嶽を遥拝した津屋（港）と、その近くで麻や綿花を栽培していた布機地と藍染め池の位置を目視しました。豊見城における綿花の栽培や機織りの歴史については、まだ詳細不明とのことです。

最後に、赤嶺秀義氏への謝意を表し、第11回うるくまーいの実施報告といたします。



豊見瀬嶽での説明 中央：赤嶺秀義氏



第11回うるくまーい参加者

字宇栄原のサングワチー — 女性たちが伝えるもの —



平 良 徹 也
(県立芸大附属研究所 共同研究員)

小禄地域の旧12カ字では現在でも、女性たちだけのサングワチー（三月遊び）が盛んに行われている。

また、宜野湾市や豊見城市、慶良間諸島、那覇市の旧真和志地域などのごく一部の旧字（ムラ）を除いては、県下にその行事をほとんど見ることが出来なくなっている。これらのことはこれまでに報告してきた通りである。ではこの盛んであるとされる小禄地域にあって、サングワチーの持つ意味あるいは真に理解されていると云えるのだろうか。答えは否である。時代の流れとともに、ものみな変わる人の世にあって御願行事がまだ多く残されないとされるこの小禄地域ではあっても、この伝統的な行事の持つ意味あるいは次第に語られなくなっていて、イベント化の傾向も見られるようになり、存続の危機さえもがかすかに生じ始めているのである。

本稿はサングワチーの持つ意味あるいは実地調査のうえで確認し、現況を記録するとの意図のもとになされたものである。宇栄原婦人会（会長上原安子／副会長赤嶺光差枝／会員150名／2016年4月現在）の協力を得て、ここにその一部を紹介出来ることとなった。（敬称略）

（註 サングワチーには男性たちだけの行事を行っている地域や男女合同で行っている地域もある。）

はじめに

字宇栄原のサングワチーは、今年（2016年）は旧暦3月4日にあたる4月10日（日）に実施された。近年では、その旧暦3月4日当日が平日にあたる場合、止むを得ず、御願（カ一拝み）のみをその日に行い、式典や余興（遊び）はその週末の日曜日に行っていた。今年は幸運にも暦に恵まれ、日曜日となった10日の一日で、供物の準備からカ一拝み、式典と余興（遊び）などの一連の行事が、都合よく実施された、と云うわけである。その一日の動きを紹介すると云うことになる。

資料

サングワチーのご案内

皆様お待ちかね、いくつになっても心華やぐサングワチーが迫ってまいりました。今年も例年に負けず、婦人会会員の皆様の演舞は、ご来場いただいた皆様方に楽しいひと時をご提供できることと思います。
さあ、皆様そろって楽しいサングワチーを過ごしましょう。多くの会員皆様のご参加をお待ちしております。

記

★カ一拝み

平成28年4月10日（日曜日） 午前10：00より
会員の皆様の参加をお待ちしています。

★式典及び余興

日 時： 平成28年4月10日（日曜日） 午後5：00より
場 所： 宇栄原自治会館 2階ホール
会 費： 大人：1,500円 子供：500円 サカテ：200円（1世帯）
※75歳以上の方はご招待いたします。
(当日、ご本人様のみ有効となります)

※サカテ、会費の申し込みは3月30日（水）までに、各班長へお申込み下さい。
※会館での演舞練習は3月28日（月）～4月8日（金）午後7：00～9：00まで

但し、土曜日・日曜日は休みです。

※会員の皆様の参加を心よりお待ちしています。

班長名：

電話番号：

（資料提供 字宇栄原婦人会）

サングワチーは基本的に事前の準備に始まり、遊びの当日を迎え、事後の処理で終わる、と云うような、時間と儀礼との複合的な構造体である。紙幅の都合で説明は省略せざるを得ないが、宇栄原のサングワチーと云えども、遊びの場へカミを迎え、持て成し、カミとの交歓（神人交歓）の内に祭祀の目的（息災や豊穣など）を獲得するために行う神事・直会／饗宴の複合的な構造体なのである。サングワチーの当日の儀礼と時間の配分は資料（「サングワチーのご案内」）から以下の通りであることが分かる。

単純化して示すと

1／チルデーを盛る（左資料に無。次ページ）は供物の準備に相当し、2／カ一拝みは神迎えのための神事に相当し、3／式典および余興は直会・饗宴の神人交歓と云うことになる。

本稿では以下、1. チルデーを盛る、2. 御願（カ一拝み）、3. 遊び（式典および余興）との3つの項目立てで紹介していくことにしている。祭祀の構造を確認しつつ、女性たちが祭祀に掛ける思いの一端を紹介出来るのではと思う次第である。

1. チルデーを盛る

（註 宇栄原ではシンムイをチルデーと呼んでいる。）

宇栄原婦人会が使用するチルデー（長尺の御膳）は横72センチ 奥行き45センチ 深さ5センチもあるような大きさで、通常使用される縦横1尺ほどの方形の御膳2枚を横並べにしたものよりもさらに大きなものである。この大きな器を大地に見立てて、チルデー（ここではシンムイの意）は積み盛られる。食材のコンペン・赤まんじゅう・ドラ焼き・巻がんの4品（各80個）計320個、タマゴ80個（紅梅卵にする）に、大根（丈半分にして使用）、素麺2束（一束は赤く染める）に加えて、黒木（枝葉の部分で高さ30センチ）、容器のチルデーを合せたシンムイの総重量は推定約35キロ～40キロで、本体の大きさならびに総重量で他を圧倒し、おそらくは沖縄で一番の大きさであるのかも知れないものである。

その大きさに先ず圧倒される。この大きさに何時頃からなったのか、よく分かっていない。「おそらく宇栄原の東村渠（アガリ）と西村渠（イリ）が一所でサングワチーを祝うようになったころ、アガリとイリの相互協力のあかしとして、御膳二杯をつなぎ合わせたような巨大なチルデーは生み出されたのかも知れない」と、想像を巡らすばかりである。アガリとイリは綱引きでは、互いに負けられない相手だったのである。

そのチルデーは、紅梅卵作りや素麺を茹でるなどの軽作業を婦人会の役員や各班長が行い、積み盛りの重要な作業は要領を心得た経験者らが行う。そして最後に婦人会の新会長と新副会長の手によって、紅白に染め分けた白髪素麺を黒木の枝に飾り懸けて完成となる。この仕上げの素麺懸けだけは会長と副会長が行うべきと云うことで、仕上がりを待って、その場で歓喜のカチャーシーが行われる。

その後、シンムイに力を宿らせるべく、玄関先での御願儀礼へと、場所と時間と人々が移って行く。

◇チルデー（シンムイ）の図版概説



- ①チルデーの真ん中に大根を据える：大根は大地に生える根であり、しっかりと立つ柱なのである。
- ②一個ずつ確実に盛られて行く菓子類は、共同体の協力一致の精神（チュイタレーダレー）を表すもの。
- ③紅梅卵は、タマゴはヒナから大きく育てとの意。また剥き卵（ンチタマグ）で、健やかな身体であれとの意味もある。
- ④黒木は枝葉が栄えるとの寓意で、国やムラ、家々の繁栄を表現する。また、黒木の木質は堅固でち密であることから、人間としてのしっかりととした生き方に通じる。その上に戴く白髪素麺は、共白髪で、健康長寿を表現している。

2 御願（カ一拝み）

御願は午前10時頃、公民館玄関先での中央と東・西の三方向への遙拝儀礼から始められる。

資料（カ一拝みでの拝詞参照）として掲載させていただいた婦人会会長の各拝所で唱えられた手書きの拝詞（グイス）からも読みとれるように、宇栄原のムラや人々の安心安全・繁栄発展を願い、先祖の神々や諸祭神を感謝とお持て成しの場：サングワチーの御座元への御案内（ウンチケー）のために行う。

資料 カ一拝みでの拝詞

サリー アートート ウートート

今年2016年度の婦人会長・イノシシ上原安子と副会長・トリ赤嶺光差枝です。

今日の3月4日良き日に、宇栄原婦人会のサングワチーを行います。

12本3本の線香と洗い清めたお米とお酒、お塩をお供えいたします。

天の神様、地の神様、海の神様、物の神様、北の神様、東の神様、南の神様、西の神様
中央の神様、便所の神様

いつもお守り下さいましてありがとうございます。

どうぞ、これからも

災いが来ませんようにお守り下さい。

神様からたくさんの徳がありますよう

今年1年、神々の光で

この宇栄原、会員、ご家族をお守り

言葉の不足や失礼は未熟者ですので

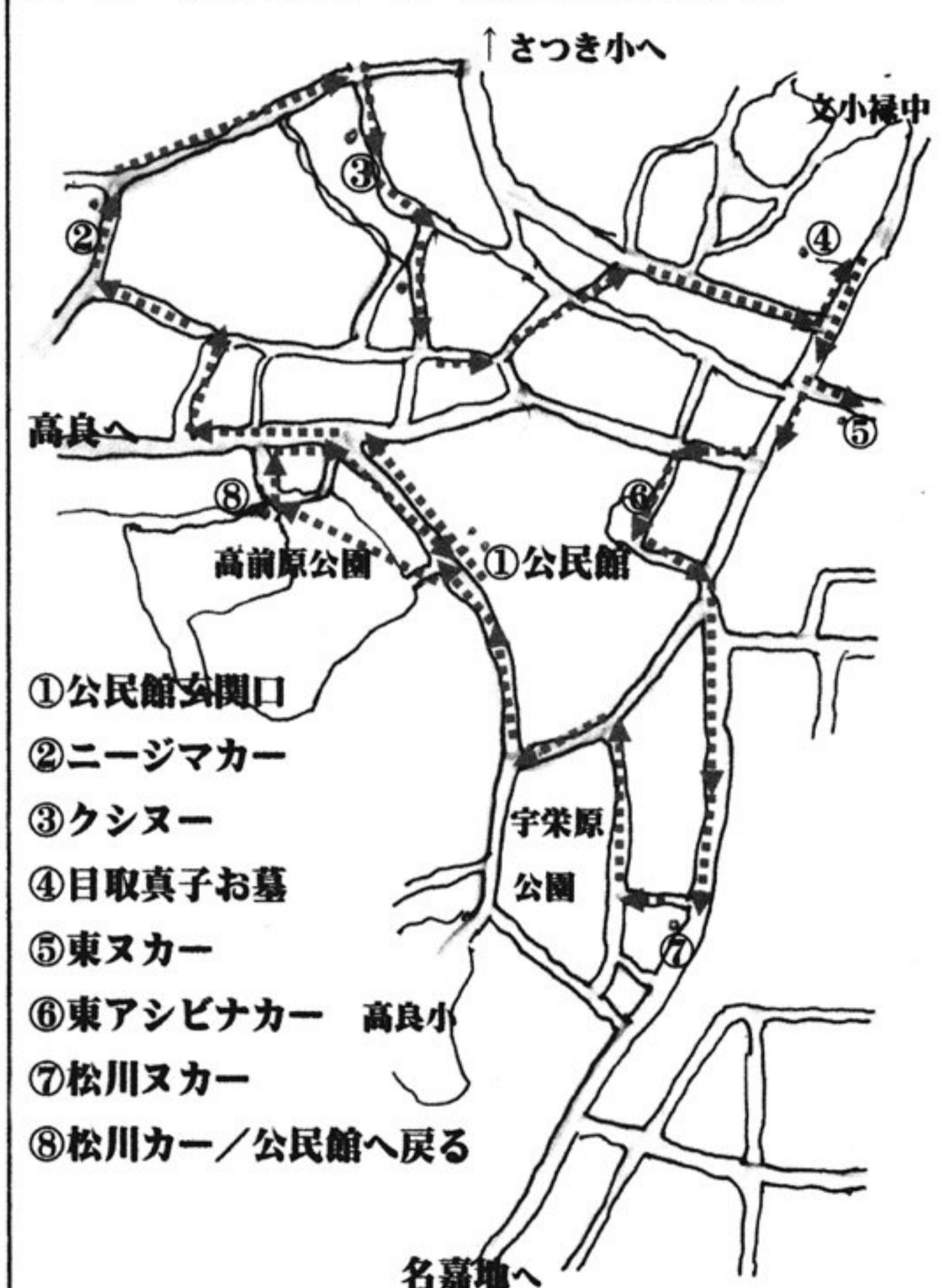
お見逃し下さい。

サリーアートートー ウートートー

【2016年度婦人会長上原安子氏の手書きノート】

より同氏了解を得て掲載

図 カ一拝み巡拝コース（全行程徒歩による）



注『小禄の拝所』小禄南公民館編の地図（p 293）に調査事項を記述した。

玄関先①での御願は、これから各拝所へ出るための立願に当たるもので、同時に、供物チルデー（シンムイ）にカミをご案内して寄り付かせる儀式として為されるものであろう。アガリとイリのビンシーを揃え（つまり全村の意）、御花米、御神酒、香ばし御香と白紙を各拝所でおまつりして、巡拝は為されるが、婦人会会長の合図の元、参列の有志各位が一斉に手を合せる形での御願ならびにそれに続く力チャーシー奉納演舞はそれぞれにじつに丁寧なものであった。結局このカ一拝みの巡拝自体は二時間弱（午前10時頃から正午）の時間を要して滞りなく終了したが、岡がちな宇栄原地内のこと、全行程徒歩による巡拝は宇栄原のことを思う熱意がなければ出来るものではないものと思ったものである。

なおカ一拝みは、ムラ建てした先祖と日頃の水の御恩への感謝ならび水の呪力による身体の清めのために行い、目取真子お墓参拝は宇栄原の芸能の恩人への御案内として行うと考えてよいだろう。

表 カー拝みの拝所と儀礼

	図 版	事 項	備 考
①公民館		厨 房：紅梅卵と染付け素麺の準備の場 和 室：チルデー盛りとカチャーシー奉納 玄関先：遙拝祈願とカチャーシー奉納 【赤嶺和雄資料1992年に同じ】	宇栄原の公民館供用施設。 かつては琉球王府時代のムラヤー跡地に立地していたが、日本復帰後現在地に移動した。
②二ージマカー		本年は祈願のみ、近所のお宅で不幸があつたため、カチャーシー奉納は行われなかつた。 【赤嶺和雄資料1992年：イリヌカー】	イリのアシビナーの近くにある。アシビナーは綱引きにはイリの集合場所となり、イリの女性たちのガーデーの場となつた。
③クシヌカー		祈願とカチャーシー奉納 【赤嶺和雄資料1992年：ムラガー】	根屋外間が近世期に開鑿したカーデ、ムラガーレとして機能した。産水を汲むウブガーレでもあつた。梵字碑が立てられている。
④目取真子お墓		祈願とカチャーシー奉納 【赤嶺和雄資料1992年に同じ】	宇栄原の組踊「雪払」 ^{ゆちばれ} 「久志之若按司」や舞踊の芸能を指導した目取真子ほかを祀る。
⑤東ヌカー		祈願とカチャーシー奉納 ※儀礼終了後に中ユクイ（休憩を取る事）。 — 御茶と飴玉が出された — 【赤嶺和雄資料1992年に同じ】	アガリの生活用水や農業用水に使用された。かつては石組みであったが、コンクリートに戦後替えられている。「アガリヌカミガーレ」とも云う。
⑥東アシビナカーレ		祈願とカチャーシー奉納 【赤嶺和雄資料1992年に記載無し】	アガリのアシビナーから現在地に移動。アシビナーは綱引きにはアガリの集合場所でアガリの女性たちのガーデーの場となつた。
⑦松川ヌカーレ		本年は祈願のみ、近所のお宅で不幸があつたため、カチャーシー奉納は行われなかつた。 【赤嶺和雄資料1992年では記載無く、クシジガーレ（越地井）が拝まれている】	松川ヌカーレの坂道沿いに2014年7月「松川ヌカーレ」および「火の神」の祭神が祀られている。
⑧松川カーレ		祈願とカチャーシー奉納 【赤嶺和雄資料1992年：ウタキのクサイカーレ】	宇栄原の村建ての地のカーレとも云われているが、未詳。 高前原公園はカヤモーでもあったとの伝承もある。

(註 この項は、赤嶺和雄「字宇栄原の聖地」『ガジャンビラ』11号所収を参考文献に使用しました)

3. 遊び（式典および余興）



ドラ鉦を叩く、婦人会会長（左）と副会長（右） 2016年

資料 2016年度に行われた演目【出演者名記載省略】

1	宇栄原太鼓／京太郎／獅子舞	（25人）	招待演舞
2	かぎやで風	（1人）	古 典
3	うりずん	（6人）	民 踊
寿	高瀬川	（1人）	日 舞
5	越後おんな舞	（2人）	日 舞
6	収納奉行	（4人）	琉 舞
7	女の一生	（1人）	日 舞
8	※ 間にカチャーシー		
9	合唱「うれしいひな祭り」	（全員）	童 誠
10	合唱「三百六十五歩のマーチ	（全員）	歌 誠 曲
11	祇園ざくら	（2人）	日 舞
12	いちゅび小	（6人）	琉 舞
13	※ 間にカチャーシー		
14	紅花	（1人）	日 舞
15	恋の季節	（5人）	モダンダンス
16	鳩間節	（1人）	琉 舞
17	きよしのズンドコ節	（全員）	モダンダンス
18	安里屋ユンタ	（全員）	民 踊
19	※ 間にカチャーシー		
20	カナーヨー	（4人）	琉 舞
21	トゥルルンテン	（10人）	民 踊
22	大河の流れ	（1人）	日 舞
23	合唱「汗水節」	（全員）	民 誠
24	合唱「みかんの花咲く丘」	（全員）	唱 歌
25	酒の宿	（1人）	日 舞
26	止めのカチャーシー	（全員）	
27	ガーエー		止 め

◇2016年の概況

午後2時になると会館2階外側の階段踊り場で、婦人会会長と副会長の手によって、ドラ鉦が高らかに打ち鳴らされる。「サングワチアシビやいびんどー、あしひがめんそーり」とのことを、ムラの女性たちだけでなく、男性たちへも知らせる意味があると云う。それに応えたと云う訳なのか、午後4時を過ぎると、晴れ着に身を飾った女性たちが、次から次と遊びの場へとやって来る。

午後5時、来賓客や招待された75歳以上の女性の先輩諸氏の見守る中、式典が開始され、前年度の婦人会会長や旧役員らへ感謝状や記念品の贈呈等が行われた。式典には、婦人会新旧役員の引き継ぎがこれで完了した、との通過儀礼的な意味合いをも含み持たせていると云うことなのだろう。

この式典がつつがなく終了すると、招待演舞で余興の座開きとなる。「宇栄原太鼓」一行が太鼓踊りも勇ましく、その場を祓い清めて行く。その後は予め組まれているプログラム（資料参照）に従つて滞りなく進行する。午後5時50分ごろから余興（遊び本番）の時間となり、午後8時過ぎの2時間余、琉舞だけでなく、日舞やモダンダンス、民踊などの舞踊のほか、会場全員による童謡や唱歌、沖縄わらべ唄などの合唱やカチャーシーを楽しんでいる内に、たちまち止めの時間がやって来る。長いようでいて短い、そのような時間の流れであった。

さて、儀礼止めのガーエーについて、ここでは紹介しておきたい。ガーエーは元々は綱引きの際のイリやアガリの女性たちがムラの男性たちの士気を鼓舞するあるいは煽るための芸能である。太鼓連が打ち鳴らす大太鼓の大音響に、丈3尺ほどのマチ棒を打ち振りつつ女性たちが踏み鳴らす大地の音声が一つのかたまりとなって呼応する。三月遊びの座元では、座を囲んで円陣を組みそれが行われた。宇栄原婦人会の団結と意氣軒高を示したものとして、印象深く残っている。

なお、芸能の流れとしての讃め歌・祈願歌・座興的歌舞の展開については、今回は詳しく触れる余裕が無く、後稿を期さねばならない。

註 左の演目表は宇栄原婦人会から提供されたプログラム表に、当日追加された演目も書き加えて作成したもの。

◇かつての演目資料から見えてくるもの

右の資料は、今から36年前に赤嶺喬氏によって撮影され、近年DVDに焼き直しして宇栄原婦人会に寄贈された3枚(6時間余)に収められている当時実施された多彩な演目の確認のために翻案し、一覧表にまとめたものである。もちろん筆者の知識不足によって、未詳とせざるを得ない部分も多々あることは御覧の通りである。今年の演目(前ページに掲載)とは非比較して頂きたい。両資料間に横たわる時間経過や芸態変化のもつ意味あいに、きっと何かを感じて頂けるはずである。紙幅の都合により、以下にその要点のみを紹介する(詳しくは後稿を期する予定)。

- ①所要時間が長く深夜を過ぎてなお行われた。
- ②演目数が74と多く、踊り手の数も多い。
- ③舞台での演舞に比べ、座での演舞が少ない。
- ④演目の九割以上が琉舞である。
- ⑤舞踊の衣装類はほぼ揃えられている。
- ⑥日舞やフラダンスはまだ見られない。
- ⑦複数回の演目が数多くある(出演者は別)。

カチャーシー12回 カナーヨー4回
浜千鳥3回 四つ竹3回 イニシリ節2回
祝い節2回 めでたい節 三村踊2回
茶壳節2回 鳩間節2回 鶯鳥節2回
ハイサイおじさん2回

- ⑧カチャーシーは座の盛り上げや総参加をめざす意味あいから幾度と無く繰り返された。
- ⑨イニシリ節中に三月遊び歌が含まれている。(三月遊びが豊穣予祝祭である事を物語る)

⑩なぜ複数回の演目が見られるのか、様々な理由が考えられる。かつてのイリとアガリの対抗意識(歌勝負)^{うたすーぶ}や世代間の対抗意識なども検討されるべきである。—以下省略。
この映像を見つづふと思った。女性たちがこのマツリに掛ける情熱は一体どこから来るものなのだろうかと。果たしてそれはかつてのイザイホーの夜籠りや神遊びなどとつながっているのではないか。これは私だけの幻想であったのか、妄想が止まらない。

この稿・了

資料 1980(昭和55)年に行われた演目【婦人会所有のDVDより起案:筆者】

	演 目 ()人	演 目 ()人
1 祝い節演奏(年長者との盃交換)	38	酒酔い狂言「演題未詳」 2人
2 カチャーシー(前舞) 大人数	39	カナーヨー 1人
3 かぎやで風 5人	40	茶壳節(狂言仕立て) 4人
4 めでたい節 6人	41	カチャーシー上記出演者 外多数
5 祝い節 1人	42	いちゅび小節 8人
6 未詳: こっけい踊り 2人	43	花 風 1人
7 未詳: 打組踊り 2人	44	ハイサイおじさん 6人
8 四つ竹 1人	45	イニシリ節 5人
9 金細工 3人	46	新日舞(股旅もの) 1人
10 カナーヨー 3人	47	海ぬチンボーラー 1人
11 浜千鳥 3人	48	カチャーシー上記出演者 外多数
12 わした糸満海人 2人	49	茶壳節 5人
13 祝い節 2人	50	打組踊り「演題未詳」 8人
14 浜千鳥 10人	51	鳩間節 1人
15 カチャーシー 大人数	52	高平良万歳 1人
16 未詳: 宮古芸能 8人	53	狂言: 戻りかご 3人
17 カナーヨー 10人	54	創作琉舞: 太鼓ばやし 2人
18 小学節 1人	55	カチャーシー 大人数
19 いい正月やいびんやー 8人	56	ていんさぐぬ花ほか小学生 3人
20 鶯鳥節 1人	57	八重山民謡:「カラ山」 6人
21 カナーヨー 1人	58	娘ジントーヨー 8人
22 四つ竹と三村踊り 10人	59	組踊よりの長刀舞「未詳」 1人
23 独唱「薬師堂関連歌」 1人	60	「なーびなくー」狂言 3人
24 カチャーシー 大人数	61	カナーヨー天川 2人
25 浜千鳥と南洋浜千鳥 5人	62	カチャーシー 大人数
26 今年節 1人	63	八重山民謡:月の美しゃ 1人
27 めでたい節 8人	64	ジュリ馬 10人
28 上り口説 1人	65	カチャーシー 大人数
29 鶯鳥節 1人	66	鳩間節 1人
30 汀間当 1人	67	金細工 3人
31 カチャーシー 大人数	68	八重山舞踊:マミドーマ 14人
32 貫花と四つ竹 6人	69	カチャーシー 大人数
33 高平良万歳 1人	70	イニシリ節 5人
34 四つ竹の輪踊り 8人	71	カチャーシー 大人数
35 三村踊りの輪踊り 8人	72	ムームー踊り「大島育ち」 8人
36 カチャーシー上記出演者 外多数	73	カチャーシー(止め) 大人数
37 宮古民謡: 演題未詳 6人	74	ハイサイおじさん 2人了

赤嶺勢理客の唐船曳き



幹事 長嶺 弘善
(大学非常勤講師)

へ船が来た。引き潮に遭い船は浅瀬に乗り上げた。首里に連絡があり、城内大騒ぎとなった。そこで大親が願い出て、満潮時刻を見計らい「船に縄をかけて船を入港させた」。国王からお褒めの言葉を頂いたと、由来記にある。

由来記を初めて読んだのは、門中行事に関わるようになった40代である。そして、子育て中に我が子に読み聞かせた絵本を思い出した。儀間比呂志『ふなひき太良』(岩崎書店1971年3月)である。台風で不作にもかかわらず年貢を収奪する薩摩船を、太良が縄をかけて引き戻す。そのため、絵本では太良が村人や薩摩役人の数倍の大きさ、巨人として描かれている。船に縄をかけて曳くのが、大親の伝承とそっくりで、儀間は由来記から着想を得たのだろうか、と思ったくらいである。だが、たとえ偉丈夫の大親でも、太良のような巨人(まるでガリバー)に見えて、一人で唐船を曳かせるのは現実離れしている。

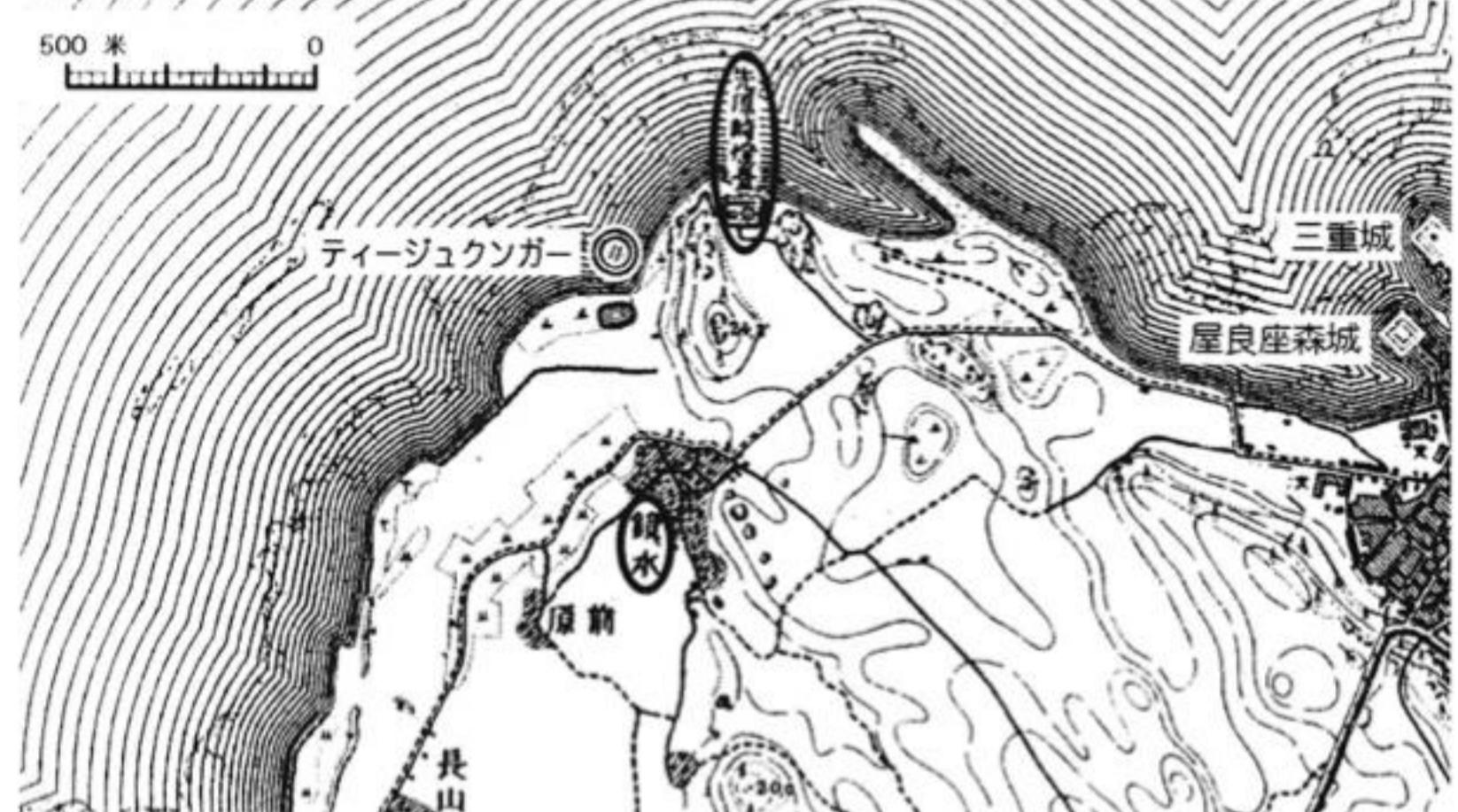
ところで大嶺村は、豊見城間切に属していた1500年代中期、先祖は進貢船帰国時の曳舟船頭の役を担い、沿岸警備の任に就いていた(『大嶺の今昔』字大嶺向上会2008年2月6頁以下)。また1846年(尚育王12年)5月に、フランス船座礁にあたり、先祖が救助に大活躍した。功績者は位階昇進し褒賞されたという(同17頁)。これは、王府正史である

『球陽』に記録されている(『球陽 読み下し編』[番号1869]角川書店1974年3月)。1846年は異国船が頻繁に出現し、異国人が上陸徘徊するので、王府は首里城の3門に重扉を設置し堅固にしたという(球陽[1868]～[1875])。同年4月には英船で来琉したベッテルハイムが強行上陸している(『大百科』[該項目])。そして「イギリス人」の滞在が、年末年始の波上宮での王府典礼挙行に「碍[害]有る」と記している(球陽[1876])。ベッテルハイム上陸の翌5月に、仏船が座礁した。

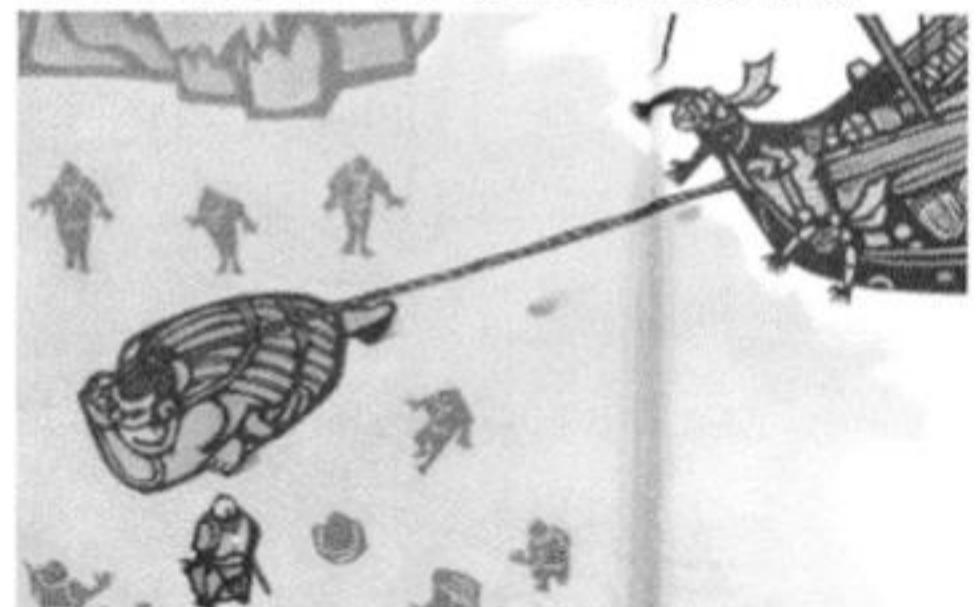
仏蘭西船が大嶺海岸の暗礁に座礁し、「風波猛起」のなか転覆の恐れがあった。目撃した小禄間切大嶺村捷(百姓身分の地方役人)金城は、村人と多くの小舟を集めた。そして「海水に練熟」した筑登之2名を伴い、救助に乗り出した。両筑登之は潜水探査して船に損傷がないことを確認し、また、鉄縄(碇等)で船を係留し安定させた。「翌朝に至り、仏船礁を下り以て恙[つが]無きを得たり」という(『球陽』)。

琉球王朝時代1600年前後のティージュクンガー伝承は、赤嶺勢理客大親の代表的な英雄物語であり、前号で述べた。今回、『仲本の由来』(1954年9月)にある、「大親と唐船」伝承について考える。なお唐船とは、進貢船や御冠船あるいは中国船など、多様な意味用例があるという(『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社1983年4月)。由来記の唐船がいずれであるかは不明であるが、帆船である。

国土地理院:陸軍省陸地測量部1919年(大正8年)測図21年発行・那覇「先原崎燈臺」と「鏡水」集落を明示。前原は鏡水の、長山は大嶺の小字。スケール表示は500米[m]。崎原岬北方に約300m幅のリーフが広がる。三重城と屋良座森城の間に唐船入港口、その奥に御物城がある。



儀間比呂志『ふなひき太良』20頁・部分



米軍空中撮影写真1944年12月31日(ON24591)

(沖縄県公文書館蔵、(株) Nansei 調整、に加工)

撮影高度3万フィート(9144m)で、リーフ先端の荒々しさがわかる。



した筑登之2名を伴い、救助に乗り出した。両筑登之は潜水探査して船に損傷がないことを確認し、また、鉄縄(碇等)で船を係留し安定させた。「翌朝に至り、仏船礁を下り以て恙[つが]無きを得たり」という(『球陽』)。

同様場面を『今昔』は、「翌朝は風波全くなく風いで仏船も無事に離礁した」と記す。天候の記述は『球陽』ではなく、大嶺村の伝承であろう。前日とは一変し満潮時海面は穏やかで、船は自力で離礁した。フランスで最先端スクリュー推進の海軍汽走戦列艦が完成したのが1850年である（蒸気船-Wikipedia）。座礁した仏船は、気帆船（蒸気外輪走と帆走の併用）と考えられる。「風波全くなく風いで」いるので帆走はできず、だが曳航も必要なく、蒸気外輪で自力離礁した。捷金城らが、前日、大時化のなか転覆を防いだ功績は賞賛に値する。

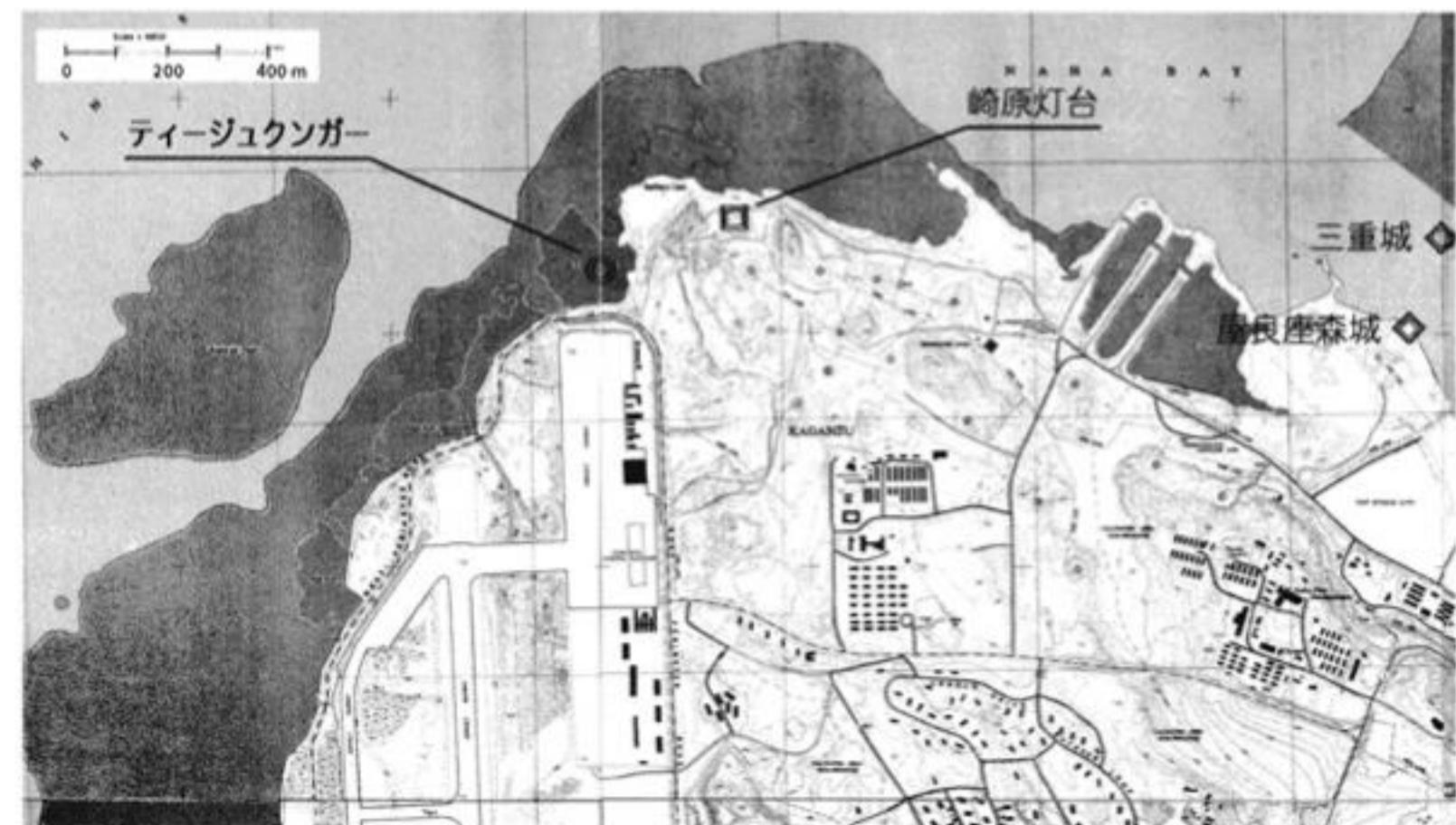
大嶺村捷金城から約250年遡る1600年前後、豊見城間切赤嶺村の百姓である勢理客大親が、首里城勤めをしていた。多くの剛力伝説から、城内（あるいは国王）警護の勤務と考えるのが自然である。そこへ唐船座礁の知らせが入った。満潮を利用した救助策は海事関係者なら誰でも考えつく筈だが、由来記では、城内大騒ぎである。想像するに、唐船が座礁した地点は、詳細な海底地形を把握した上で、離礁方策に細心の注意を要する難所であった。一歩間違えば船底損傷や沈没を招く状況だったからこそ、大騒ぎとなつたのである。そして王府は唐船救助を大親に託した。大親は、港から岬にかけて地形地質を調査し、一帯の状況に精通し、安全な航路と危険な暗礁とをよく把握していたからである。「水に関わる仕事」（門中伝承）とは、水先案内を含めた那覇港湾管理業務と推測すれば、納得できる。

ここまで考えると、ティージュクンガー伝承は訂正を要する。農業の傍ら生計の一助として漁をするなら、赤嶺村からは宮城や具志の海岸が近い。そうではなく、大親は一定の学問を修めて地方役人となり、港湾管理業務の任についた。そして、暗礁（干潟）が広がる崎原岬を調査する過程で、崎原岬の西側で「カ一」を発見したのである。なおその際の大親の行動が鏡水集落へ伝えられ、伝承が生まれたと書いた（拙稿『ガジャンビラ19号』）。鏡水集落の起源は定かではないが、一門中の出自は15～16世紀に遡り、始祖は沖縄市山内から儀間村そして鏡水へと寄留したという（『字鏡水創立百周年記念誌』58・297頁、鏡水郷友会2005年9月）。1600年頃には恐らく集落も形成されつつあったであろう。

唐船座礁に際し、赤嶺勢理客も、捷金城と同じように村人や小舟を集めたであろう。鏡水集落あるいは大嶺村の協力も得たと考える。長縄で小舟を数珠つなぎにし、その舟列を数編制つくり、まとめて唐船につないだ。満潮になるのを見計らい、ゆっくりと唐船を曳きながら、潮流にも注意を払い一つ一つ数隻の小舟で船腹を押した。ついに、絶妙の角度と好時期で離礁させることができ、那覇港へと曳航・入港させたのである。大親はこれらの総指揮をした。この唐船曳きの物語は、大親の別の顔、剛力と並ぶ知力を見せてくれた。観察力鋭く自然界を認識把握し、災難において深慮をめぐらすことのできる智恵の人、知者勢理客大親がいた。

なお、港湾管理（調査）詰所は岬東側にあったのである。大親は、赤嶺村はずれではなく詰所近くを、自らの墓地と決めた。崎原岬と那覇港を見渡せる場所を、誇りある仕事を想起させる永眠の地として選んだ。大親が現代に生きていれば、崎原東海岸での散骨を遺言しただろうと考えるのは、飛躍だろうか。

米軍(GHQ-FEC・極東軍工兵局)作成1948年10月（県公文書館蔵）
SAKIBARU CAPE SHEET 138 中心に合成編集。スケール表示400m。
鏡水崎原から南西側・大嶺にかけての広大な暗礁干潟がよくわかる。



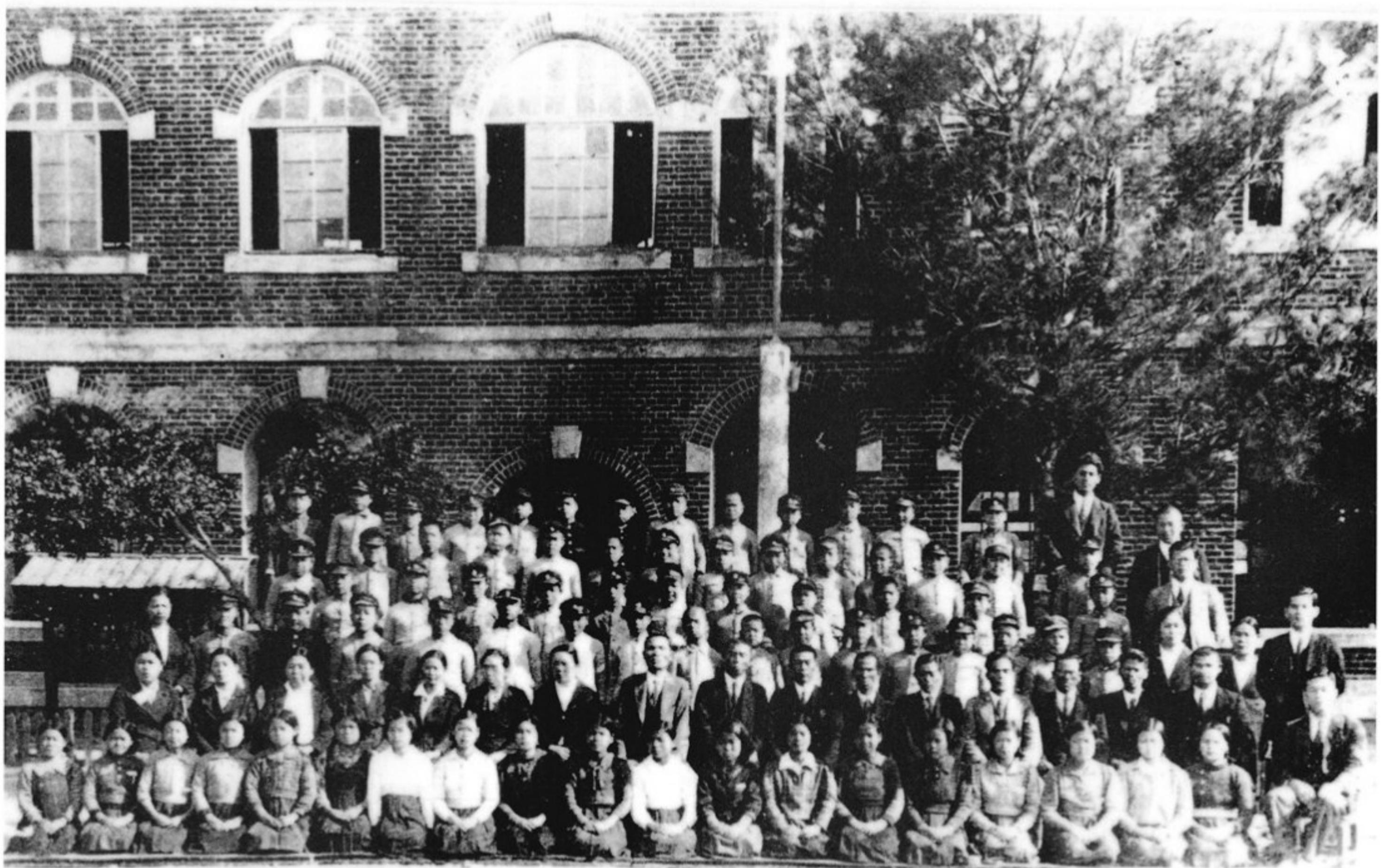
国土地理院地形図：那覇市鏡水2016年3月
海面色を除色し、西海岸の暗礁を見やすくした。
崎原岬周辺の埋立がよくわかる。スケール200m。



赤嶺勢理客が唐船曳きを思案する

（作画：琉大みどり、構成 © :ZEN）





昭和15年小禄尋常高等小学校卒業記念

昭和15年小禄尋常高等小学校卒業記念写真、提供：上原正男氏（大正14年生）字宇栄原、6段目（上段）右側から6人目、柱ポールの右側。二段目中央（左から8人目）与那国善三校長。二段目右端椅子に腰かけた方は長嶺秋夫先生。



写真左側饒波川越しに石火矢橋・豊見城グスクを望む。写真中央、布織女妃御墓と香炉に刻まれている（綿織物・綿栽培を琉球に普及させた梅千代、実千代姉妹の墓？）二人は1611年に尚寧王、儀間真常とともに那霸港に着く、2年後には綿織物大帯を織るのに成功。写真右側豊見瀬嶽（赤瓦屋根）と豊見城グスク内にあった井戸群、雨乞いの神、農耕の神、木バナ嶽、布織女妃御墓等が祀られている。